

勝部付近における戦さの年表

— 恩讐は彼方へ、鎮魂を祈る —

古墳時代

- 585年頃 用明天皇の頃、中臣勝海と物部守屋が勝部の地を拓く。（勝部史誌）
- 587年(用明2) **丁未の乱**
- 7- 政治の主導権争いから、崇仏派の厩戸皇子(聖徳太子)・蘇我氏と排仏派の物部氏が河内で戦い、物部軍は敗れ一族は誅殺された。以後、物部氏の勢力は中央から排除された。

飛鳥時代

- 645年(大化1) **乙巳の変**
- 6- 中大兄皇子(天智天皇)・中臣鎌足(藤原氏の祖)らが蘇我入鹿を宮中で暗殺して蘇我氏を滅ぼし、その後、大化の改新が行われる。
- 649年(大化5) 中央から離されて物部莊玉岡郷勝部里を領有していた物部宿禰廣國が、その祖先神である天火明命、宇摩志間知命、布津主命を物部布津神として祀り、物部郷の総社として勝部神社を創立する。
- ・ 乙巳の変で怨敵蘇我氏が排除されたので、廣國は積年の願いであった物部氏の祖先崇拝の社を、誰はばかることもなく勝部に創建した。（私見）
- 672年(天武1) **壬申の乱**
- 6- 天智天皇の没後、皇位継承をめぐって壬申の乱が起こる。
- 7-13 吉野を発し美濃から近江に進攻してきた大海人皇子(天智の弟、後の天武天皇)軍は、この日「安河の浜(やすかわのほとり)」で近江朝廷軍(天智の子、大友皇子)を破り、瀬田の決戦で近江朝は滅ぶ。
- 7-22
- ・ 大友皇子は自殺し、そばに物部連麻呂と舎人が居たという。物部連麻呂は、その後異様な出世ぶり、正二位左大臣にまでなって、物部氏永年の願いであった中央政権への復帰を果たす。
 - ・ 一説には物部連麻呂が殺めたという。
 - ・ 当時の野洲川の本流は今の境川あたりを流れていたらしい。今の守山市街を中心に立入、出庭のあたりから三宅、横江あたりにかけて戦われたであろう。
 - ・ この屍累々たる惨状の地に、安直氏が益須寺を創建し、行路病者を収容したのではないか。（野洲町史）



現在の野洲川河原

- 694年(持統8) 持統天皇は、益須郡に醴泉の効験があらたかであったので、益須寺に水田4町歩などの褒賞を与えた。・・・ 安河の浜の戦後22年
- ・ 持統天皇は、先々帝天智天皇の子であって、大友皇子の姉でもあり、先帝天武天皇の皇后でもある。近親が争った地にある益須寺に、亡者怨霊の鎮魂を祈ら

せた。(私見)

平安時代

794年(延暦13) 比叡山東門院守山寺が最澄によって草創された。
・「比叡山の東を守る」意を以て名付けられたこの寺名が、草創時からのものであれば、地名「守山」の初見であるが、まだ検証されていない。

800年頃 勝部の安楽寺が千手観音を本尊として開基。その後千手観音は勝部神社の本地仏として崇拝され、安楽寺は勝部神社の奥院となる。

851年(仁寿1) 勝部神社の物部布津神に正六位上を、882年(元慶6) 従五位下の神階を授かる。

1156年(保元1) 保元の乱

7- 朝廷の内部抗争の解決に武士の力を借りた。源氏、平氏のそれぞれが同族内で二手に分かれて戦った。平清盛と源義朝が後白河天皇に付き、以後5代にわたって院政が行われた。

1159年(平治1) 平治の乱

12-9 近臣の勢力争い(藤原信西・平清盛と藤原信頼・源義朝)で、内乱が発生した。

12-27 乱で敗れ、京より東走した源義朝の子頼朝(12歳)が、守山で源内兵衛真弘に襲撃されるが名刀「髭切り」で難を逃れる。

(守山天満宮近くの薬師堂内に源内塚あり)

12-28 平維盛を大將軍に5万人の大軍が、野路を発して守山を通り蒲生に宿した。



薬師堂内の源内塚

1160年 2-9 敗軍の頼朝は近江国で捕えられて京の六波羅へ送られ、死刑を当然視されるが、清盛の継母池禅尼などの嘆願などにより死刑を免れ、3月11日に伊豆国へと流された。

1180年(治承4) 源氏の挙兵

7- 佐々木高綱(母を通じて頼朝の従兄弟)が頼朝の挙兵を聞いて京より鎌倉へ馳せる途中、守山に宿した。この後1184年、宇治川の戦いで梶原景季との先陣争いで功を挙げた。

1185年 4-25 壇ノ浦の戦いで平家が滅亡し、鎌倉時代へと遷る。

・平氏は頼朝(13歳)を捕らえたとき死刑にせず、情けが仇となり滅んだ。

鎌倉時代

1190年(建久1) 源頼朝は東国を平定し、
10- 千余騎の御家人を率い、守山の青柳の清水に立ち寄って上洛した。

1192年(建久3) 頼朝は征夷大將軍に任ぜられ、鎌倉で武士による政治が始まる。以後武権に基づく政権執行が、700年近く続くこととなる。

1200年頃 土御門天皇(1198-1210)の御病氣快癒を起源とする松明祭が始まる。

1207年(承元1) 住蓮房母公の悲話

法然上人の弟子、住蓮房と安樂房は、極樂浄土への憧れを朗唱する仏事を京都鹿ヶ谷の草庵で行い、その評判は高く、後鳥羽上皇の侍女、松虫姫(19歳)と鈴虫姫(17歳)も、上皇が熊野詣で中に参加し、出家の決意をした。上皇は激怒し、住蓮房は馬淵(近江八幡市)で、安樂房は六条河原で処刑と決した。

住蓮房の母公は、処刑の前に一目会いたい一心で、盲目になりながらも、焰魔堂まで追って来た。そこに、処刑報告のため帰洛途中に通らなかった馬上の侍に、馬淵までの距離を聞いた処、侍は驚き、今処刑したばかりの住蓮房の母公と知り、持参の刀を差し出した。母公は生きる望みを失くして近くの池に入水、刀は後年に大宝神社に奉納され、今日まで5月の例大祭の渡の先頭で奉持されて来た。



この事件は承元の法難と呼ばれ、法然・親鸞など 例大祭で奉持される、謂れの刀 7人が流刑、門弟4人が死刑に処せられた。背景に、法然の浄土宗の発展に対する旧仏教勢力からの弾圧があった、と伝えられている。

1221年(承久3) 承久の乱

5-15 後鳥羽上皇、幕府の専横を憤り徴兵。近江國守護佐々木廣綱(兄)は朝廷軍に、信綱(弟)は幕府軍に分かれる。幕軍勝利後、信綱は地頭職を与えられ、氏信(信綱の子、京極氏の始祖)が近江國守護となる。

勢多伽丸の処刑

後鳥羽上皇方に加担した父廣綱は、鎌倉幕府の立場にありながら背信行為をしたことに強い非難と憎悪が向けられ、処刑された。この時、勢多伽丸(13歳)は出家して仁和寺に住し、道助入道親王に育てられていたが、父の謀叛に連座して捕らえられ、処刑されることとなった。

これに対し道助親王と勢多伽丸の母親は必死の助命懇願を行い、人道を尊重する執権北条泰時にとっても、勢多伽丸を処刑することは耐えがたいことであった。しかし、廣綱の弟で乱における宇治川の戦で抜群の武功を挙げた信綱が、自分の武功を帳消しにしてでも勢多伽丸を処刑することを強く主張した。信綱は泰時の妹婿にあたり、幕府において枢要な人物であったため、泰時はこれを退けることが出来ず、断腸の思いで勢多伽丸を処刑した。(Wikipedia)

骨肉の争いで、弟信綱は兄廣綱の血統を断ち、己が嫡流となって子孫に繋いだ。

1242年(仁治3) 佐々木氏8代信綱死して大原(長男)、高島(次男)、六角(三男)、京極(四男)に分流す。

1252年(建長4) 勝部刑部尉物部重文ら物部一族8名が、勝部神社に武運長久伝子孫誠を祈願して金燈籠3基を寄進す。

1279年(弘安2) 時宗の一遍上人(40歳)が焰魔堂に留錫、踊り念仏で近隣の村人などを教化した。

建武の新政

1334年(建武1)

1- 後醍醐天皇は足利尊氏などの武士を味方につけ、鎌倉幕府から天皇親政を奪回した。

しかし、その後のうち続く混乱を收拾しきれず、政権は崩壊に向かう。

1335年 12- 足利尊氏、政権を奪うため鎌倉にて挙兵、西上して近江に入る。
官軍は瀬田、宇治のほか、志那の浜は延暦寺僧徒をして伊岐代宮に城を拵え、山徒千余人で備える。

1336年 1- 2 伊岐代方面で決戦あり。足利軍は高師直を将にして勝を収める。

1- 尊氏は野路-田上-大石-宇治を経て入京。後醍醐天皇は日吉神社に行在。

1-11,12 瀬田付近で、足利軍と官軍が数万で激戦。石山寺の宝蔵が破却された。

1-12,13 官軍北畠顕家、東国の大軍を率いて愛知川に着。直ちに六角氏頼の観音寺城を破り、足利軍を払いつつ、

1-14 蒲生、野洲、栗太を南進して、志那、山田、矢橋より坂本に渡り、天皇に勝を献上した。その後尊氏軍は駆逐され、九州へ下る。

5- 尊氏は九州より大軍を率いて上り、天皇は延暦寺に行在す。近江には山門領、日吉社領多く、延暦寺の檄に応じ官軍に従う者多し。

6-14 京極道誉ら足利軍の将として守山にて戦う。郡内社寺の大半を焼失。道誉は木浜役所を設け、官軍、山門が握っていた湖上運送権を奪う。

10下~11-3 建武政権は近江で敗戦、本拠地比叡山への補給路を断たれ、降伏す。

○ 両軍は栗太平野に充満し、所々で激戦あり。兵火四方に起こり、人家寺社灰燼し、従軍の群民が屍を晒したるは勿論、老幼婦女が悲惨の最後を為した者もあり、罹災は言語に絶えたり。(近江栗太郡志)

室町時代

1336年(建武3) **南北朝時代**

11- 7 足利尊氏は光明天皇を擁立して室町幕府を開く。後醍醐天皇は吉野へ逃れ、南北朝時代が始まる。

○ 建武3年正月より同5年に至る間兵乱の多さに疲弊し・・・酸鼻の状は独り京に止まらずして栗太平野にも修羅の巷は現出されたり。

(近江栗太郡誌)

1350年(正平5)

12- 4 守山を拠点とした北朝側の六角氏頼と、上野直勝を総大将とした南朝軍は、数度にわたって野洲川原で戦い、周辺の村々、拠点となった社寺は大きな戦禍をうける。

南朝軍は大勝して瀬田へ進み、人家、橋、建部神社が灰燼する。

12-10 態勢を立て直して西上する六角軍と、南朝軍が守山で血戦、六角軍が大勝す。

この2回の戦、守山瀬田間両軍の将士走馬燈の如く南奔北走し、馬蹄の塵は兵火の煙と和し、栗太の天地に殺気横溢せり。(近江栗太郡誌)

1392年(明德3) 南北朝の合一が成り、後亀山天皇は吉野から京都へ還幸される。

1395年(応永2) 勝部神社は神殿を焼失。



袖堀が石積みの伊岐志呂神社

1399年（応永6） 勝部神社の三間社流造の神殿が再建された。

中世の戦と信仰

法然を開祖とする浄土宗、その流れをくみ親鸞が開き蓮如が広めた浄土真宗、踊り念仏の時宗などが守山に広まったのは室町時代が最盛です。同時に、この時期に失われたと思われる古代からの寺院として益須寺、赤野井寺、欲賀寺があります。それまで永年に亘って続いてきた土地制度が武力で改変され、まさに下克上の世相となって価値観がひっくり返し、人びとが依るべき信仰も変わり、寺院が改宗することもありました。

合戦で神社仏閣を失いながら、それでも信仰を同じくする地域の人たちは、いち早く再建に取り組みました。また、六角氏一門は合戦では社寺を自ら焼亡しながらも、戦勝または戦死者供養のため、あるいは己の後生のため処々の社寺を再建しました。（野洲町史）

当時の信仰のことは起請文によく現れています。誓詞の相手は約定する相手ではなく、あくまでも八百万の神仏です。「誓いを破れば天罰を蒙るとも覚悟の上」と誓います。当時の人びとの神仏とのかかわりは極めて大きいものでした。何ごとも神仏に縋り、後生は浄土にというのが当時の人びとの信仰であり生活でした。（私見）



誓詞を書き起請文とする熊野牛王神符（「お烏さん」とも呼ばれた）

いわゆる路傍の「おじぞうさん」

今、我われが言うところの「おじぞうさん」をよく見ると、ほとんどが地藏像ではなく、阿弥陀仏の坐像で、中にはまれに五輪塔が刻まれているものもあります。でも「おじぞうさん」と呼んでいます。

中世が、仏典が示す通り、戦さ、疫病、飢饉などがはびこる末法の世となって、阿弥陀如来に縋る信仰が広まり、上流の人達は屋外でも拝めるようにと、小型の石に阿弥陀仏像を刻み、墓石や五輪塔の傍に建て、菩提を弔うようになりました。



いろいろな「おじぞうさん」

また一方では、地獄極楽や六道輪廻の思想も広がり、室町時代には、賽の河原に居る亡きわが子が地藏に救ってもらえるという「地藏和讃」により、地藏信仰も庶民に広く受け入れられました。阿弥陀仏のみを信じる浄土真宗が圧倒的な村においても、地藏盆が行われて来たように、「あの世へ行ったわが子が、賽の河原で鬼に責められ、母恋しさに泣き暮らしているところを救ってくださるという地藏菩薩への信仰」は親の母性に強く結びつきました。あの赤いよだれ掛けに沁みついたわが子の匂いを地藏さんに嗅ぎつけてもらい、わが子を救って頂くのです。いつの間にか、阿弥陀像でも地藏像でもよくなっていたということです。（瀬川欣一著「近江 石のほとけたち」）

蓮如、金森へ

1465年（寛正6） 蓮如は、延暦寺衆徒に東山大谷本願寺を破却され、金森に以後3年間寄住して布教に努める。

1466年(文正1)

- 1- 延暦寺衆徒が蓮如の寄住する金森を攻める。蓮如は赤野井に難を避ける。これを金森合戦



といい、史上初の一向一揆という説もある。

- ・金森は、東山道守山宿(東門院) から、志那港、坂本、山中越、京へと続く重要な通路(比叡山道ともいう)の途中にあって、山門の権益源である。その地を一向宗の支配に任せることはできない、というのが山門の立場。(私見)

金森御坊



東門院の石造文化財(鎌倉時代)

1467年(応仁1) 応仁の乱

- 5-26 足利将軍の継嗣争いに管領畠山・斯波両家の家督争いも加わり、東軍細川勝元と西軍山名宗全の勢力争いに発展、諸大名もそれぞれに分かれ、ほぼ全国に争いが拡大した。十数年に亘る応仁の戦乱で、主要な戦場となった京都全域が壊滅的な被害を受けて荒廃した。近江では、ともに佐々木信綱より9代目に当たる江南の六角高頼が西軍に、江北の京極持清が東軍に属して争う。

- ・六角氏は近江守護の座をめぐって、3代6人に亘って互いに争い、この時期に三上荘に数十回陣所を設けた。(野洲町史)

1468年(応仁2)

- 12-5 東軍は、六角政堯(高頼の従兄)が西軍の六角高頼の拠る守山城を攻略し、京極持清の兵が高頼の観音寺城を陥落させる。

守山の地は東海道と志那街道との分岐点なるを以て、元弘建武以後南北朝の時代、合戦はここに二三回繰返されたりし例あり。応仁乱にも、六角高頼は此の要衝に城郭を構えて兵備を修む。

京極持清の兵二千餘人と六角政堯の兵一千餘人は、高頼の城を前後より挟撃す。両軍血戦終日、攻圍軍は風上に火を放ち民家を焼く。焰炎天に沖し城遂に潰ゆ。高頼軍の将、馬淵、下笠、楢崎等十七人擒となり自殺す。(近江栗太郡誌)

- この守山合戦の戦火をうけて、民家大焼し、光明寺(守山・真言)、大將軍神社(古高)など多くの社寺も焼失と伝える。勝部神社境内も戦場となり、兵馬のため神殿大破、神田・神宝を散失する。

- 1470年(文明2) 六角氏が勝部神社に備う長船則光作の太刀を奉納した。

1487年(長享1) 長享の乱(鉤の陣、第1次六角征伐)

- 9-12 高頼は応仁の乱後許されて第9代将軍足利義尚から近江守護職を与えられた。しかし高頼が寺社や奉公衆の所領を、軍功を挙げた部下への恩賞に与えんと押領したため、近江国内に所領を持つ近習達の訴えで、将軍自ら率いる幕府軍の遠征が開始された。(近江の文化と伝統)
 - 9-24 細川政元の官軍と、高頼の軍が野洲河原で激しく戦火を交える。
 - 10-22 将軍義尚は、高頼軍10人の首を守山の街頭に晒して威を示す。
 - 10-27 鉤(栗東市)に御所を新造移座。守護大名らは少し離れて陣所を展開した。守山には斯波氏の武将織田広近、勝部には若狭守護の武田国信、上笠には赤松氏の武将浦上則宗、蓮台寺には公家の正親町三条實望など。(近江の文化と伝統)
 - 12- 古高が兵火にかかり、大將軍神社はまた延焼した。
- 1489年 3-26 将軍義尚25歳で病死による遠征中止まで、531日の間、鉤に御所として存在した。

1490年(延徳2)

- 7-22 足利義材(後、義植と改名) 第10代将軍となる。
- 10- 六角高頼は許されるも、部下は横領した寺社本所領の返還を拒絶す。

延徳の乱(第2次六角征伐)

1491年 8-27 将軍義植、六角高頼征伐のため三井寺を行営とする。

1492年(明応1)

- 5- 4 将軍義植は甲賀谷の高頼攻撃のため、軍を守山に進める。
- 10-16 将軍義植、甲賀の高頼を攻めんがため、三井寺を立て守山に至り、翌日金剛寺に着陣する。
- 11- 5 六角高頼は甲賀より伊賀へ逃げて近江は鎮定す。
- 12-13 六角政堯(高頼の従兄) の猶子が近江守護となる。
- 三上社は1471年、1475年に東西軍の戦禍を受け、この年にも兵火にかかり大破したが、翌年に「誰云うとはなしに」再建の議が起こり、守護地頭の名は無く、村衆万民の寄進で修理された。これは個が集まって衆となり、外に対すという、自立した村落形成の母胎となったといえる。(野洲町史)



御上神社(楼門、拝殿、本殿)

戦国時代

1497年(明応6) 六角高頼が勝部神社の神殿を造営。棟札に奉再興勝部物部大明神御宝殿と記す。

1506年(永正3) 六角氏が勝部神社に備州長船祐定作の太刀を奉納した。

永正の錯乱(草津合戦)

- 1507年(永正4) 管領細川政元が暗殺され、後ろ楯を失った第11代将軍義澄が近江朽木谷の六角高頼を頼って来ると、高頼は一旦は保護する。
- 1508年 7- 前将軍義植が大内義興、細川高国らの支援で将軍に復帰。高頼は義植を支持す。義澄は、守護代伊庭貞隆の保護を受け、九里信隆によって水荃岡山城に匿われる。高頼と伊庭は敵対関係となる。
- 1509年 10- 2 将軍義植江州の義澄を攻めんとして、大将大内義興三萬餘騎、草津に陣取る。六角氏綱(高頼の子)、大軍には奇計に如かずと、夜討になれたる兵三百餘人を選び出し、十五人を一隊とし、前日夜半に観音寺城を出、守山、草津の処々、森林の内に伏さしめ、次で四千餘騎守山邊に向かう。・・其夜の暁、敵陣の怠りを見て火矢を射かけ草津を焼く。討取る所の首八百餘級を観音寺城に送る。(近江栗太郡誌)
- 1511年 3- 5 義澄の長男義晴(後の第12代将軍) が水荃岡山城で生れる。
- 9- 6 義澄が病死。六角氏綱は匿っていた水荃岡山城主を討ち取って義植支持を表明することで守護職を京極高きから奪回し、以後六角氏が戦国時代末まで守護職を保持した。伊庭貞隆は湖北へ出奔、以後、浅井亮政の支援を受けつつ、六角父子との抗争を繰り広げる。

1514年(永正11) **伊庭軍と六角軍、大萱・勝部の合戦**

- 2-19 六角軍は比叡山より出て来て大萱及び勝部で戦い、伊庭軍を敗る。
伊庭父子は、この後も幾度も六角氏に反旗を翻すも、1520年8月水基岡山城を陥落されて没落した。

1526年(大永6) 六角氏が、勝部神社に備州長船勝光作の太刀を奉納す。

1527年(大永7) 12代将軍足利義晴が近江長光寺から守山、坂本を経て朽木に至る。

1532年(天文1) 一向宗は、一向一揆を恐れた法華衆・細川晴元らにより山科本願寺を焼き討ちされ、本拠を大坂石山に移す。

1565年(永禄8) **矢島御所の戦**

5- 覚慶(後の第15代将軍義昭)は、兄の第13代将軍義輝らが暗殺されたので京から奈良に脱出した。

11-21 覚慶は六角承禎の庇護のもと、甲賀を経て矢島へ進出し、在所とした。

1566年 2-17 覚慶は正統な血筋による将軍家再興のため、矢島御所において還俗し足利義秋と名乗った。

○ 義秋の上洛の動きに対して、三好三人衆の軍勢三千騎が突然矢島御所を襲撃してきたが、奉公衆の奮戦により、からくも撃退した。(Wikipedia)

4- 六角父子は一向宗徒と衝突していたが、顕如(本願寺11世)と和睦なる。

1568年(永禄11) 六角父子は、織田信長率いる上洛軍と観音寺城で戦って敗れ、種村道成の守山城も羽柴秀吉・池田信輝に攻められて陥落、道成は戦死。ここに、400年間に及ぶ近江源氏佐々木氏の近江支配は、この4年後となる元亀の争乱終結とともに完全に終える。

9- 義秋は、義昭と改名後、織田軍と浅井軍に守られて上洛し、第15代将軍として補任。

1570年(元亀1) **元亀の争乱**

5- 信長は近江通路の経営のため、守山に稲葉一哲、勝部に稲葉貞通、浮気に佐久間信盛等を配置。稲葉貞通は勝部神社を陣所とした。

5-6 信長方の稲葉一哲と六角一揆連合軍とが、守山南口から繕村にかけての地域を戦場として、斬首1200級に及ぶ激戦を展開する。これを守山合戦という。

6-4 信長方の佐久間信盛と柴田勝家の軍勢が、立入城を拠点とした六角一揆連合軍と野洲川原で衝突。笠原表で合戦し、六角軍は780人が討取られ敗退する。

信長入京と立入宗継

6-24 御倉職の立入宗継は、入京を促す勅使として信長を出迎える。

・立入城主でもある立入宗継は、公武に働きかけ、乱世を收拾した勅使です。

織田信長と15代将軍足利義昭を結びつけて信長が世に出る機会を提供し、

皇室の衰退を挽回した功績は大きいものがあります。(守山史誌)

6-28 信長、家康は、浅井長政と朝倉景健らの軍を近江姉川の合戦で破る。

8-25 一向宗徒を糾合した一揆軍が六角承禎の軍勢と連合し、金森、守山、
/ 浮気、勝部のほか、栗太・甲賀郡など湖南の各地に蜂起して戦った

9-3 が、信長の佐久間信盛軍に攻められ、鎮圧された。



矢島御所跡に建つ矢島町自治会館

9- 信長に対して、一向宗徒が一揆を起こし、石山合戦(～1580年)が始まる。

11-24 信長と六角承禎の和睦なる。

1571年(元龜2)

5-9 一向宗徒は金森・三宅を中心として、信長方の佐久間信盛の軍勢と戦う。この激戦を金森大乱と呼ぶ。のち、人質を交換して和睦する。

9-12 信長は、延暦寺衆徒が朝倉義景に徒党するのを忌み、これを攻めて延暦寺の堂塔を焼き、衆徒を殺りくする。(比叡山焼き討ち)

1572年(元龜3)

1-23 六角承禎、義治父子は一向宗徒を誘い、金森、三宅の両城に拠って信長に反抗する。

3- 野洲・栗太両郡の土豪惣代が、信長の命により連署して、金森・三宅への出入をしない旨の起請文を出す。これら60余通の起請文は勝部神社神宮寺の宝勝寺に託された。



土塁跡が残る三宅の蓮正寺

7- 佐久間信盛は勝部神社を陣所として金森城、三宅城を攻略し、勝利する。

9- 信長は金森に朱印状を出して楽市楽座を開かせ、諸役を免除する。

安土桃山時代

1573年(天正1) 信長は將軍義昭を追放し、室町幕府は滅亡する。 安土桃山時代へ遷る。

- ・ 行政の改革に民心一変せり。されば佐々木時代各地に割拠せし近江武士は諸國に縁故を求めて移住、本郡にても最勢力の青地氏を始め、・・勝部、古高・・等の豪族悉く伝来の故地を捨て、他國に移り仕を求め、信長秀吉部下の諸將士代って威を振ふ。

- ・ 焼亡の古刹は為に復興せず、真宗の新寺は続々勃興する等各方面に亘る古來未曾有の大変革は行われたり。(近江栗太郡誌)

1594年(文祿3) 勝部神社では1575年に社殿造営さる。この年関白秀次の命により旗竿用に伐り出した神竹の礼として、宝殿の造営と神田が寄付された。



勝部神社 本殿

1600年(慶長5) 9月15日 関ヶ原の戦い その後

- ・ 家康は、9月18日八幡本願寺別院に宿し、19日草津常善寺に宿陣す。勝ち奢る甲冑武士は雲の如く充滿せり。

- ・ 是より先、豊臣氏の諸將は大兵を率いて連日街道を東進せしが今は敗退、数万の馬蹄は遽しく昼夜を分たず西走したるに続いて、勝ち誇る東軍の兵馬は堂々として西進し、東近江は恰も走馬燈の如き状況なりき。(近江栗太郡誌)

9-24 捕えられた石田三成は守山に宿し、翌25日家康の大津の營に連れ行かれた。

水争い(水論)

- ・ 大宝神社で1440年頃から今に続く相撲祭(ソウモクサイ)は、子供の三番勝負で一勝一敗のあと、行事が途中で「この勝負、来年に預け置く」と声をかける。これは二町と北中小

路との水争いがもとになっていて、決着をつけないで遺恨を残さない方法は先人の知恵と言われている。

大宝神社文書によると、永禄年中(1558-70)に、氏子付50余ヶ村から、勝部を含む25ヶ村が抜けた記録がある。

理由は、1558年の145日間に及ぶ日照りで近江国内八千人の疫病死人発生が契機となり、下克上の世情のもと、神威による仲介機能も働かなくなり、川上側の村々が用水を優先採取するために一斉に抜けたと思われる。(私見)



大宝神社の土俵

- ・ 勝部が関わる水論も何回かありました。1912年(大正1) 二町ともめたのは、勝部の赤目川・中水川・柳溝川の井関の操作をめぐって、互いに数十人が実力を行使せんと争ったもので、死傷者は出ませんでした。これが発端で今井組管理者・葉山村長・物部村長などの関係者を巻き込んだことでした。

互いの主張が折り合わず、2年後に大津地方裁判所の調停で和解しています。

江戸時代

1614年(慶長19) 彦根藩井伊軍が大坂の役に出陣の際、勝部神社に祈願し、野営した。

1842年(天保13) 近江天保一揆

1833~39年と続いた大飢饉に加え、幕府が不当な検地を行ったので、野洲・甲賀・栗太の農民1万2千人が強訴し、死傷者を出すことなく「検地十萬日延期」の証文を勝ち取った。しかし、一揆後の取調で死罪になる人、獄死する人、帰村後衰弱死する人など大勢の犠牲者を出した。



天保義民の碑

1861年(文久1) 皇女和宮の降嫁と古高俊太郎

幕府の開国策に反対する尊王攘夷派に対して、皇女和宮を将軍家茂に降嫁させる公武合体が成り、和宮一行約3万人は、守山宿を一週間に亘って通行した。

- ・ 古高俊太郎は尊王攘夷派で、妹を和宮の侍女として東下させ、尊王の大義を宮をして将軍に説かしめんとしたが、妹は供奉の列には加われなかった。

1864年、俊太郎は池田屋事件で捕縛され、禁門の変の際、獄舎延焼にまぎれての逃亡を恐れた役人により、判決が出ていないのに他の囚人とともに、斬首された。(近江栗太郡誌)

1861-1864年 勝部神社は、幕末にも領主の膳所藩主に、旗竿用として計19本の神竹を奉じた。

近代-現代

1873年(明治6) 徴兵令の発布。明治維新により我が国古来の文化は否定され、何ごとも欧米に追い付くべく、国民皆兵の原則で、富国強兵へと舵が切られた。

	物部村の				(近江栗太郡誌)
1877年(明治10) 西南戦争	従軍者数	2人	うち勝部	1人	
1894年(明治27) 日清戦争	〃	16人	〃	7人	出征後、間もなく講和
1904年(明治37) 日露戦争	〃	83人	〃	18人	物部村の戦病死者5人

1914年(大正3) 第一次世界大戦 16人 // 6人 勝部の戦死者1人

1945年(昭和20) 守山駅空襲

7-30 太平洋戦争終結のわずか16日前、米軍艦載戦闘機が守山駅を襲撃、11名が死亡、22名が受傷した。空母ハンコックを発進したグラマンが4機、3回にわたって機銃掃射。蒸気機関車は大破し、旅客車1～4両目の大勢が犠牲になった。県下の空襲被害では東レに次ぐ大きさだった。

8-15 1937年日中戦争開始以来の、8年に及ぶ戦時体制はやっと終わった。

安土桃山時代後300年、当地が戦場となることはなく平穏な歳月を経たが、18世紀末に産業革命が始まって以来国家間の競争が激しくなり、戦争が起こると守山の人びとも戦地に赴き、悲惨な状況に巻き込まれた。そして此の空襲により守山も戦場になってしまった観がある。

今、兵器は飛来する爆弾、蔓延する細菌、拡散するガスなど、一旦戦争が始まれば前線も銃後も区別などないことが知られる。

勝部神社「顕彰殿の由緒書き」は、最後の戦争について、こう記している。

守山、吉身両学区出身の英霊二百七十五柱ここに鎮まる。

先の大戦は熾烈を極めた。そして国敗れる。幾多の命は広野、凍原そして海洋に散っていった。皆、家族の安泰と国の安寧を願わぬものはなかった。

私達はこの尊い犠牲と、今日の繁栄を享受したことに感謝し、再び戦争による悲しみを味わうことのないことを誓い、英霊の永遠に安かれと祈るとともに、尊い命の代償として得た平和を祈念する礎として崇敬の念をもってここに祭る。

平成十三年八月 守山市遺族会



市民運動公園の「平和の祈り」

出典：守山市史、守山市誌、近江栗太郡志、野洲町史、勝部史誌、近江の文化と伝統、Wikipedia

2020年(令和2)5月